

【Remudyニュースレター第67号】

配信日：2015年05月19日

「筋ジストロフィー患者における静脈血栓塞栓症と長期予後」に関する研究

2015年5月1日付けのInternational Journal of Cardiology誌で紹介

日本の筋ジストロフィーの患者さんにおける静脈血栓塞栓症を調べた研究がInternational Journal of Cardiology誌(オンライン版)に報告されましたのでご紹介します。長期に入院しているデュシェンヌ型筋ジストロフィー患者102人を対象として、下肢静脈血栓症の有病率を調べ、その後5年間の予後を追跡した多施設共同研究です。

静脈血栓塞栓症とは、下肢静脈に血栓ができ、それが肺動脈に流れて詰まることで突然死をきたしうる病態で、一般には長時間のフライトに伴う「エコミークラス症候群」としてよく知られています。診療では産婦人科や整形外科領域の術後管理において特に注目されており、近年日本においても血栓症の予防処置が保険償還されるようになり、新規の抗凝固薬の適応が承認されるなど、その予防や治療が注目されています。

筋ジストロフィーの患者さんには、長期臥床、筋ポンプ障害、脱水、心不全、凝固能亢進などの危険因子が複数あるため静脈血栓塞栓症をきたす危険性が高いと考えられます。今回の研究によるスクリーニングの結果、約1/4の患者さんに無症候性の下肢静脈血栓が存在し、その有病率が高いことが明らかとなりました。統計学的解析から、特に体重が少ない(筋肉量の少ない)患者さんに下肢静脈血栓症が有意に多く、人工呼吸器を使用している、車椅子に移動せずにベッド上で過ごすことが長い患者さんに発症しやすい傾向がありました。このような患者さんでは、弾性ストッキングの使用や、積極的な車椅子移乗が推奨されると述べられています。

長期予後に関しては研究者の予想と反し、肺血栓塞栓症をきたす患者さんは全体の4%以下と少なく、下肢静脈血栓が存在しても長期予後に有意な影響がありませんでした。その理由について著者らは、最大の死因である心不全・不整脈の影響が大きすぎて静脈血栓塞栓症の影響が隠れてしまった可能性がある、と論じています。現状では、特に症状のない患者さんを積極的にスクリーニングする利益はなさそうですが、心不全治療が進歩した将来には状況が変わるかもしれません。一方で、症状がある下肢静脈血栓症は今回含まれておらず、肺血栓塞栓症が診断された場合の予後は不良でしたので、これらにおいては積極的な治療を検討する必要がありそうです。また、頻脈が独立した予後規定因子であることが明らかとなり、β遮断薬などによる頻脈の積極的な治療が予後の改善に重要かもしれません。今後のさらなる研究が期待されます。

今回は、筆頭著者の木村公一先生にお願いして情報を提供させていただきます。

木村先生、ありがとうございます。